

創作ダンス授業における社会人基礎力育成についての一考察 —— 問題解決学習の課題に着目して ——

細谷 洋子・田村 典子

Basic Social Skills promoted by dance class at Shikoku University :
Focusing on the subjects of a study involving problem-solving

Yoko Hosotani and Noriko Tamura

ABSTRACT

The aim of this study is two-fold. Moreover, it considers the original viewpoint “the virtuous circle of learning” while considering training for the development of basic abilities that are required to work for the development of society by conducting dance activities at a university.

First, we describe the tasks that the students face in a study involving problem-solving. Second, on the basis of students’ self-valuation, we determine the levels of basic abilities that are required to conduct dance activities in society and the capability elements of the abilities that were rated high. Creative dance activities comprise various aspects. One concerns the elements that constitute a dance : a theme, music selection, choreography, production and creativity. Moreover, it includes aspects that are more profound and that are required for smooth performances : human relations, a gap against an ideal and schedule control. These aspects are included in the study, and the students determine and apply solutions on basis group consensus. Through the process, a better dance piece is created and better human relations are built.

With regard to creating dance activities, the required degree of the “ability to execute,” “creativity,” “capability to control a situation,” “influence power*,” “active listening ability*,” “planning,” and “autonomy*,” were rated high. This indicates the importance of experience ; the three factors with the “*” mark were rated higher by those who had practical experience.

The capability elements that were rated high with regard to creating dance activities were “creativity,” “ability to execute,” “capability to control situations,” “active listening ability,” and “finding subjects ability.”

KEYWORDS : class for creating dance activities, problem-solving study, basic social skills, physical education at a university

I はじめに

本研究では、次の二つのテーマを据えている。一つは学生の社会人基礎力育成であり、もう一つは大学における創作ダンス授業の学習効果である。

その背景として、大学教育の質を保証するために、各大学で独自の到達目標を定めることが求められる、平成20年に中央審議会で「学士力」が例示された。学士力は「専門知識、基礎学力、社会人基礎力、人間性・基本的な生活習慣という領域全体をカバーしているのが特色」¹⁾で、社会人基礎力とはそのうちの「直接的にはコミュニケーション・スキル、論

理的思考力、問題解決力、チームワーク、リーダーシップ、統合的な学習経験と創造的思考力などに、集中的に含まれている」²⁾。このことから、社会人基礎力は主に人と積極的に関わり合い物事を成し遂げる力から成るといえる。また、社会人基礎力の育成は、専門知識や基礎知識の向上とも密接に関連しており、経済産業省編の『社会人基礎力育成の手引き』では、以下のように述べられている。

「社会人基礎力」の育成として、問題解決場面や集団での振る舞いが求められる場面を設定しつつ、同時に、個人中心の専門知識・基礎学力を高

める場面が設定されているということが、「学びの好循環」を生むと考えます。それが実現すれば、自然と「学力」の向上もなされると考えているわけです。(経済産業省, 2010, p63より引用)

つまり、社会人基礎力の効果的な育成には、「問題解決場面」や「集団での振る舞いが求められる場面」の設定が必要不可欠であり、「専門知識・基礎学力を高める」という既存の教授内容をいかに教えるかという方法論に工夫が求められているといえよう。

これを踏まえて、ダンス学習の特性を改めてみると、平成24年度から中学1・2年生でダンス授業が必修化されるが、体育における他の運動領域と異なり、「心身の解放」「身体による豊かなコミュニケーション」「いま・ここから作り出す問題解決学習(ゴールフリー学習)」がダンス学習の特性であるⁱⁱⁱ。また動きの面白さ(妙味)に気付き、もともと自分の中にある「踊り心」、つまり未開拓の感性に気付くという新しい経験をもたらす学習でもある。

ここで着目すべきは、ダンス学習が「いま・ここから作り出す問題解決学習(ゴールフリー学習)」であるという点である。特に創作ダンスでは、主体自らテーマを決めて、動きや音楽、構成を創っていくが、テーマを決める段階から、自分たちの関心はどこにあるのか、と課題を探し出すところから始まり、ダンス作品の完成度を高めるにはどうすればよいのかを考えながら舞台上で発表するまで協力して練習をおこなうという、まさに問題発見・解決のくり返しである。さらに、多くの場合は数名~10名程度のグループ活動となるため、「集団での振る舞いが求められる場面」が必然的に生じる。このようにダンス学習は、社会人基礎力育成に効果的な場面設定なくしては成り立たないのである。

そこで本研究では、社会人基礎力の育成のための「学びの好循環」の場面設定を、ダンス学習の特性そのものと重ねて、次の二つの目的を据える。一つ目は問題解決学習で学生が直面する課題を明らかにすることである。二つ目は、創作ダンス活動における社会人基礎力の必要度と、学生の自己評価を基に

実際に高められた社会人基礎力の能力要素を明らかにすることである。

対象となる創作ダンスの授業は、本学で46年間続いてきた「創作舞踊研究発表会」を学習成果発表の場として設けている専門科目「体育Ⅱ」が該当し、生活科学部児童学科で開講されている^{iv}。詳細は後述する。

この問題設定には、大学教育を取り巻く様々な状況変化が影響している。「社会人基礎力に関する研究会」によると、職場や地域社会で活躍するために必要な能力は、これまで大人になる過程で「自然に」身につくものと考えられていたが、近年の若者のコミュニケーション能力の不足が指摘されるなど、日本社会の中でこうした能力を身につける仕組みの働きが相対的に低下してきており、こうした能力に明確な定義を与え、意識的な育成の対象としてとらえる必要がでてきたといわれている^v。よって、大学教育においてそのような能力育成が期待されるようになっており、直接学生と触れ合う授業を通じて行うことがその実現の場の一つとなる。

そして、平成23年4月1日から一部改正された新大学設置基準が施行され、本学においても各授業で高められる力の明確化がなされている。民間企業が全国の大学へ行ったアンケート調査によると、「就業力育成の担い手」について、大学は、人材は極力自前で解決したいと考えており、「現在いる教員の教育力の向上」や「職員の専門性を高める」ことを半数以上が重要な対策とみなしており、「民間企業経験のある教員採用」や、「外部専門機関へのアウトソーシング」はあまり検討されていないという結果の報告がある^{vi}。

これらの視点から、学生が卒業後も生涯を通して成長し、活躍できるように資質・能力を引き出す一助となるべく、授業展開を工夫することは、意義のあることといえよう。

1. 社会人基礎力

社会人基礎力の構成要素は、表1のように、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の三つの能力から成り、それぞれに3~6の下位能

【表1】社会人基礎力はどう構成されるか—12の能力要素と定義—

3つの力	12の要素	定義	発揮できた例
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力	自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる 自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持って取り組むことができる 自分なりに判断し、他者に流されず行動できる
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	相手を納得させるために、協力することの必然性（意義、理由、内容など）を伝えることができる 状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる 周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけている
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	小さな成長に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる 失敗を恐れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる 強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる 現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる 課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる 常に計画と進捗状況の違いに留意することができる 進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正できる
	創造力	新しい価値を生み出す力	複数のもの（もの、考え方、技術等）を組み合わせて、新しいものを作り出すことができる 従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる 成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	事例や客観的なデータなどを用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる 聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる 話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる 相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる 相手の話を素直に聞くことができる
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる 相手がなぜそのように考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる 自分にできること・他人ができることを的確に判断して行動することができる 周囲の人の状況（人間関係、忙しさ等）に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができる
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	相手に迷惑をかけないように、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解している 相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる 規律や礼儀が特に求められる場面では、粗相のないように正しくふるまうことができる
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りてでも取り除くことができる 他人に相談したり、別のことに取り組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、重く受け止めすぎないようにしている

*各能力要素を発揮できた例は、この内容に限るものではない。

(経済産業省, 2010, p39より引用)

力要素が定められている。「前に踏み出す力」は「主体性」「働きかけ力」「実行力」から成り、「考え抜く力」は「課題発見力」「計画力」「創造力」から成る。特に、「チームで働く力」の下位能力要素が「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の6要素あり、チームで働くためのコミュニケーション能力が重視されていることがうかがえる。

2. 平成24年度からの中学校ダンス男女必修化の背景とコミュニケーション能力育成

平成20年3月の告示の新学習指導要領により、平成21年度から平成23年度までが移行期間と定められ、平成24年度4月から中学校体育において「ダンス」の男女必修化が施行される。今回の改定の基本的な考え方は、次の3つである。

1. 教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ、『生きる力』を育成
2. 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視、授業時数を増加
3. 道徳教育や体育等の充実により、豊かな心や健やかな体を育成

これによって、小学校・中学校共に、主要教科に加え、体育の授業時数が実質10%程度増加する。また、伝統や文化に関する教育の充実の一環として、体育では中学校1・2年生で武道が男女共に必修化される。

そして、健やかな体を育む観点から、中学校体育では球技や武道・ダンスなど様々な経験をし、選択できるようになり、学校段階間の接続や発達段階に応じて指導する内容が整理され体系化が図られた¹⁹⁾。ダンスが必修化されたのは、生涯を通じて運動やスポーツに親しむ態度の育成を視野に²⁰⁾多様な運動経験を確保するためであるが²¹⁾、その背景は日本の学力観の見直しに起因しているといえよう。

今回の改定の経緯には、学習指導要領解説によれば、OECD(経済協力開発機構)の各種調査により、日本の児童生徒の課題が浮き彫りになり、国の教育

課程の基準全体の見直しについて検討され、教育基本法改正、学校教育法改正が行われ、「知・徳・体のバランス(教育基本法第2条第1号)とともに、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等及び学習意欲を重視し(学校教育法第30条第2項)、学校教育においてはこれらを調和的に育むことが必要である旨が法律上規定され、学習指導要領の改善の方向性が示された。特に、7番目の「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実については、徳育や体育の充実のほか、国語をはじめとする言語にかかわる能力の充実や体験活動の充実により、他者、社会、自然・環境とかかわる中で、これらとともに生きる自分への自信を持たせる必要があるとの提言がなされた」とある。つまり他者をはじめとする様々な環境とのかかわりがより一層重視され、改善の基本方針では、体育については、表2のようにコミュニケーション能力を育成することも強調されている。

中学校ダンスの学習内容は、イメージを身体で表現する「創作ダンス」、異文化ダンス等の「フォークダンス」、ヒップホップなどの「現代的なリズムダンス」で構成されている。そして、ダンスは「イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動」である。仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視しているというダンスは、今まさに改善の基本方針にあげられている「体を動かすこと」で「コミュニケーション能力を育成する」という喫緊の課題の解決手段として申し分のない活動である。

このようにダンス学習が中学で必修化される背景を踏まえて、大学教育において学生を対象に、ダンス学習の特性を生かした授業の展開はコミュニケーション能力育成に役立ち、学士力育成の観点からも有効と考えられよう。

【表2】新学習指導要領における中学校保健体育の目標とダンス領域の学習目標

中学校保健体育の目標	心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、積極的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。		
改善の基本方針	体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習の作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように、発達の段階のまとまりを考慮し、指導内容を整理し体系化を図る。		
ダンス	技能	創作ダンスでは、多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化を付けて即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ること・フォークダンスでは、踊り方の特徴をとらえ、音楽に合わせて特徴的なステップや動きで踊ること。 現代的なリズムのダンスでは、リズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って全身で踊ること。	
	態度	ダンスに積極的に取り組むとともに、よさを認め合おうとすること、分担した役割を果たそうとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。	
	知識、思考・判断	ダンスの特性、踊りの由来と表現の仕方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにすることが大切である。	

(2011年、文部科学省^{*)})

II 結果と考察

1. 平成23年度「体育II」創作ダンス授業の実践と調査結果

(1) 授業概要

専門科目「体育II」は、保育士資格・幼稚園教員免許取得希望者の必修科目ならびに小学校教員免許取得希望者の選択科目として後期に開講されている。

受講生は本学児童学科の2年生（19歳～21歳）男子18名、女子63名の合計81名である。ダンス経験のある者は1割に満たず、舞台経験のある者も数名しかいない。

平成23年度の授業では、10月の初回から13回目までが、創作活動になり、14回目は徳島市の公共ホール（あわぎんホール徳島県郷土文化会館、809席）での発表となった。発表までの授業時間外に、「演劇鑑賞会」、「学内リハーサル」、「前日リハーサル」、「当日ゲネプロ」、「DVD鑑賞会」などがあり、残

りの授業分を振替えて、全15回の授業回数になる。

「創作舞踊研究発表会」が初めて開催されたのは、今から46年前の1966年の四国女子大学時代である^{vi)}。2011年11月に行われたホームカミングデーにおいても児童学科同窓生の共通の思い出といえば創作ダンス発表会であり、年代を超えて当時の様子を互いに懐かしみながら思い出話に花が咲いた。このように、本発表会は約半世紀続いており、児童学科・幼児教育保育科同窓生の貴重な共通体験であり、四国大学の伝統行事の一つといえよう。

本発表会は、各クラスから運営委員が選出され、学生によって運営されている。創作ダンス活動のグループは、くじ引きによって10人前後のグループに分かれ、班長や副班長、記録、会計、衣装、音楽、演出などの役割を分担する。

本学における創作ダンス活動は、まず作品で表現したいテーマを設定し（テーマ研究）、そのテーマに沿った動きや構成を自分たちで創造していく。ま

た、同時並行でイメージに合う音楽を探し出し、3～4曲程度をつなぎ合わせていく。そして、本番の2週間前ころには、考案された衣装デザインを元に衣装を制作し、5分間という限られた作品時間の中でより効果的に表現できるように舞台照明の案も考えていく。すべて学生たちが話し合い、テーマ研究から舞台照明案まで各係が中心になって具現化していく。その際には各グループでの新たな人間関係も構築しながら、唯一無二の創作ダンス作品が創り上げられていく(表3参照)。

担当教員は学生の活動の進捗状況を常に把握し、創作ダンスで必要な活動課題を提示し、助言等を通して各グループ活動が円滑に進むように個々に応じた指導を行っている。発表会が終わり、振り返りを行うまでの約3か月間、各グループの学生と密に連絡を取りながら教員同士の連携を図り、授業時間外も学生と関わりながら創作活動に携わっていく。



(2011年, 坂東印刷制作)

【写真1】第46回創作舞踊研究発表会「表現人」のポスター

(2)自由記述調査結果と活動内容の再構成

(i) 調査概要

創作ダンス活動の問題解決学習において学生が直面する課題を明らかにすることを目的に自由記述調査を行った。

【表3】当該研究において対象となる平成23年度後期創作ダンス授業の流れ

授業回数	授業日時	授業内容	創作ダンス学習の段階
1	10月5日	オリエンテーション グループ分け後、練習計画を立てる	
2	10月10日	舞台演出学習のための演劇鑑賞会	
3	10月12日	テーマを話し合う	
4	10月19日	テーマ研究のために図書館などで調査	
5	10月26日	テーマ研究と選曲	
	10月31日	テーマ決定	
6	11月2日	選曲と動き・作品構成	
7	11月9日	選曲と動き・作品構成	
8	11月16日	選曲と動き・作品構成	
	11月24日	音楽作成完了	
9	11月30日	動きと作品構成	
10	12月7日	動きと作品構成	
	12月7日	学内リハーサル	
11	12月14日	作品構成と踊りこみ, 衣装, 照明案	
12	12月16日	踊りこみ, 衣装, 照明案 (前日リハーサル)	
13	12月17日	当日ゲネプロ (午前中)	
14	12月17日	本番 (午後)	
15	1月11日	DVD 鑑賞と振り返り	

(2012年, 筆者作成)

調査対象は、本学児童学科2年生（19歳～21歳）の「体育Ⅱ」履修者男性18名、女性63名の合計81名である。調査時期は、平成23年12月17日の発表会終了直後に課題を出し、1週間以内に提出をもらった。調査項目は2つ設定し、一つは「発表会の感想」で、もう一つは「一番高まったと思う能力とその理由」について、それぞれ字数制限なしでまとめた。

(ii) 分析方法

調査対象の8つの創作ダンス作品から選定した4つの作品³³を対象にして、各グループの構成メンバー約10人の自由記述内容を、文章全体の流れを踏まえて意味のあるまとまりに分け、文の表現を整えた。そして、創作ダンス活動グループごとに時系列に活動内容を表にまとめた。

また、創作ダンス活動グループに分けずに、更に意味のあるまとまりの内容をテーマごとにキーワードを抽出し、学生が直面した課題として分類した。

分析の観点は、自由記述の一つの「発表会の感想」では、学生にとって最も印象深かった出来事が中心となっており、グループメンバー全員の感想文を総合的に見ることで、各グループでの活動内容を読み取った。特に創作ダンスの活動を通じてグループ内でどのようなことが起こったかに着目した。また、「一番高まったと思う能力の理由」についてまとめられた自由記述は、学生が自己評価を高めるきっかけとなった出来事を抽出した。

(iii) **結果1** 創作ダンス活動で直面した課題

創作ダンス活動中の出来事を再構成したものが表4である。各グループが直面した課題を分類した結果、「人間関係」「テーマ設定」「選曲」「動きと作品構成」「衣装」「作品演出³⁴」「創造性³⁵」「理想とのギャップ³⁶」「スケジュール調整³⁷」の9つの課題が抽出された。

また、表5にあるように創作活動開始平成23年10月1日から発表会本番の平成23年12月17日までの2か月半の間にグループAでは「人間関係」「テーマ設定」「選曲」「動きと作品構成」「創造性」「衣装」「作品演出」「スケジュール調整」という8つの課題が生じ、解決していく様子が明らかになった。他

のグループも、同様に時系列で直面した課題を挙げると、グループBでは、「理想とのギャップ」「人間関係」「テーマ設定」「スケジュール調整」「選曲」「動きと構成」「作品演出」の7つであった。グループCでは、「人間関係」「理想とのギャップ」「テーマ設定」「選曲」「スケジュール調整」「動きと作品構成」「創造性」の7つであった。グループDでは、「理想とのギャップ」「テーマ設定」「動きと作品構成」「選曲」「スケジュール調整」「人間関係」「衣装」「創造性」の8つであった。

(3) アンケート調査結果

(i) 調査概要

アンケート調査の目的は創作ダンス活動における社会人基礎力の必要度と、学生の自己評価を基に実際に高められた社会人基礎力の能力要素を明らかにすることである。

アンケート調査は二つ行い、一つ目は創作ダンス活動の前後に各能力要素の必要度を5段階で評価してもらい、前後の結果を比較した。二つ目は、創作ダンス活動を通じて高まった能力要素を学生に自己評価してもらった。その際、表1にある「発揮できた例」等を学生に説明し、各能力要素についての共通理解を図った。

調査対象はいずれも本学児童学科2年生（19歳～21歳）の「体育Ⅱ」履修者男性18名、女性63名の合計81名である。調査の実施は、「体育Ⅱ」が開講された平成23年10月～12月の3か月間のうち、平成23年10月1日の創作活動開始前、平成23年12月19日の発表会終了後の合計2回である。調査項目は、2回ともに創作ダンス活動に必要な力について、それぞれ社会人基礎力の12能力要素を5段階評価で答える形式であった。

また、2回目の発表終了後には、創作ダンス活動を通して高まった能力要素を複数回答可で選択してもらい、さらに最も高まった力の一つだけ選んでもらった。集計方法については、2回分のアンケート調査結果は単純集計を行った。複数回答選択、並びの一つだけ選択された社会人基礎力の12能力要素も同様に単純集計を行った。これにより創作ダンス活

【表4】4グループの発表会当日までの出来事

	A	B	C	D	
十月	スタート時 あまり関わったことのないメンバーで不安 めんどくさそう 開始後2週間は苦痛の日々	昨年先輩のようにできるか不安 メンバーとうまくいくか不安	メンバーに不安 後でモメないか不安 昨年のようにできるか不安 人前での踊りが恥ずかしい	昨年先輩のようにできるか不安	
十月中旬	テーマは明確だったので案外いけそう テーマへのこだわりが強まり、仲間と衝突、行き詰まる	他の班とテーマ重なり、変更虐待は身近なテーマだから表現しやすいのでは？	授業、週2-3回休憩時間に集まり、皆で意見が出しあう テーマ決定時はなかなか集まらず、多数決で決定 芳監祭後仲が深まり、構成決定後、団結力高まる	苦しみしかないイメージ 話し合いの多いメンバー	
十一月末	音源探しに苦労 動きや構成づくりがとても大変で時間がかかった 「他とは絶対違う動きにしよう」というこだわり	<メンバーは遊び好きで動き出すのが遅く、練習回数少> 12月頭に振出しに戻った(教員の助言で音楽を再選定) 効果的な舞台演出方法を知り、基本となる構成を考えた	構成にあう選曲に苦労 班と比べ、焦燥感。<全員揃わず>とも一場面ごと決まっていって嬉しかった。構成が決まらない。動きづくりに苦労。自分たちらしさ探究	東日本大震災について図書館やネットで調べ防災センターに地震体験 恐怖感の表現が課題 学祭後に本格的な練習 音楽を業者が作り直し低迷	
本番まで十日間	学内リハ(十二月七日) 前々日に大体の動きが決定「この作品を演じきり、自分たちの思いをしっかりと伝えよう」という気持ちの芽生え	学内リハ当日に大体の構成と動きが決まる	他の班の演技に圧倒され、自分も感情こめて踊る	毎日集まって家族の親近感動き、構成、音楽がイメージと一致しない。仲間割れ等人間関係に問題はない。	
	前日に焦りで全員の気持ちがばらばらに			<練習量の差で少し陰鬱な空気があり話し合う。>	
	当日の授業で、教員から褒められて自信を持った	学内リハではボロボロでグループが壊れかけた		アイデアが浮かばず問題点も多く、不満のまま解散 多くのメンバーが容認型、息抜きの大切さを知る 他班の役になりきる姿感動	
本番までの1週間前	リハ後に友人からも褒められ本番までの意欲湧く	メンバー皆の声掛けや行動で士気が高まり、再スタート	本番に近づくとつれ、練習がとても楽しい	教員の指導の度に考え直すことになり大変	
	学内リハ後に脱力感。二日間はややだれて、衣装作りこの頃から一気に仲良く衣装でもめて分裂しかけた 班の中で徐々に衝突増える<全員がなかなかそろわない> 演技への気持ちの入れ方について悩み、ぶつかりあう	学内リハ後から毎日練習し、メンバーの仲も深まる 本番の踊り方などメンバー全体で建設的に案を出し、少しずつ修正できるようになる	毎日遅くまで残って練習 動きモチーフ「こんぶ」を踊ることです癒され楽しさ感じる	衣装は短期集中で皆が相談し分担して制作 衣装を工夫し、差異化 音楽や衣装が完成すると皆の心が熱く一つになり信頼感リハ前日まで振りを試行錯誤	
十二月十六日	前日リハの前日は、衝突なく本気で練習 前日リハでも、気持ちを一つにできた	前日リハの前日に、ようやく完成 皆疲れすぎた 怪我人が多くて心配	15分間だけでも感覚をつかめた	一番だったことで緊張し、皆何回か間違え少し不安 納得がいかず、夜の練習で問題点を解消	
十二月十七日	朝、この仲間たちは本当に最高だと実感 表現人でた全員が頑張れたと思う 自分の班より、B組の班が全て終わった時の方が感動	ミスがあった 自分の班だけでなく、B組、A組すべてが終わってからの感動した	このメンバーでよかった 本番は今までやってきたことを出し切った 何ともいえない達成感 妥協しなかったのが側転はそのままに	見事ノーミスで踊りきった 自分たちは本気でやった 他の班の演技も凄く素敵で伝わった いつもより、なりきっていたやりきれて、でき凄く楽しい	
事件等	ミシンのコードを無くす事件	学内リハ後に怪我人	話し合い回数重ねるがテーマや構成が決定しない 振り付けでケンカ状態 怪我人や体調不良者がでる	前日リハで課題が見つかる 担当教員の入院で不安 同じクラスの仲間の怪我でクラスの団結力高まる	
凡例	人間関係	テーマ設定	選曲	動きと作品構成	
	作品演出	創造性	理想とのギャップ	<スケジュール調整>	衣装

(2012年、筆者作成)

動を通じて高められた社会人基礎力の自己評価結果を明らかにする。

(ii) 結果

① **結果2** 創作ダンス活動における社会人基礎力の必要度

社会人基礎力を構成する12の能力要素の必要度について5段階評価の平均点を算出した結果は表6のとおりである。

また、各回における12能力要素の5段階評価平均

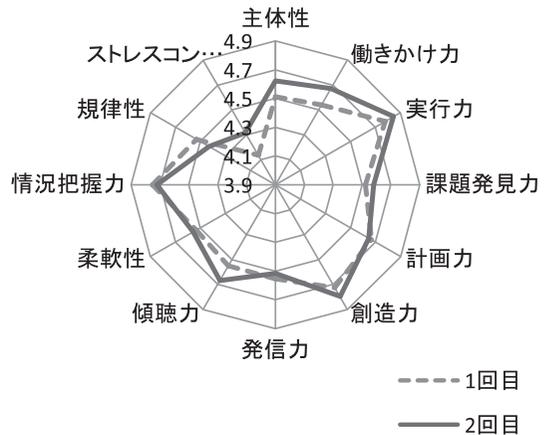
点を図で示すと、図1ようになる。

結果は、各回の平均は、1回目4.56, 2回目4.61であり、0.05上回り、学生が実際に創作ダンス活動を体験したことによって12能力要素の必要度が高まったといえる。1回目と2回目を比較すると、創作ダンス活動前は、「実行力」「状況把握力」「創造力」「計画力」の4能力要素の必要度が1回目の平均よりも高く評価されたが、創作ダンス活動後には、「実行力」「創造力」「状況把握力」「働きかけ力」「傾聴

【表5】創作ダンス活動中に直面した課題・問題

活動中に直面した課題・問題	活動グループ			
	A	B	C	D
人間関係	○	○	○	○
テーマ設定	○	○	○	○
選曲	○	○	○	○
動きと作品構成	○	○	○	○
衣装	○			○
作品演出	○	○	○	
創造性	○			○
理想とのギャップ		○	○	○
<スケジュール調整>	○	○	○	○

(2012年, 筆者作成)



(2012年, 筆者作成)

【図1】社会人基礎力の12の能力要素の必要度(5段階評価平均点)

【表6】創作ダンスにおける社会人基礎力の必要度—1回目・2回目の5段階評価平均と順位・変化値順

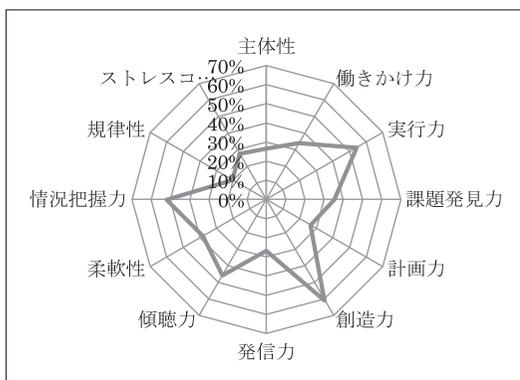
		1回目順位		2回目順位		変化値順	
平均以上	1	実行力	4.77	実行力	4.84	ストレスコントロール力	+0.18
	2	状況把握力	4.75	創造力	4.79	働きかけ力	+0.14
	3	創造力	4.72	状況把握力	4.72	傾聴力	+0.12
	4	計画力	4.66	働きかけ力	4.67	主体性	+0.11
平均以下	5	発信力	4.55	傾聴力	4.67	実行力	+0.07
	6	傾聴力	4.55	計画力	4.64	創造力	+0.07
	7	働きかけ力	4.53	主体性	4.62	課題発見力	+0.06
	8	柔軟性	4.53	課題発見力	4.58	柔軟性	+0.02
	9	規律性	4.53	柔軟性	4.55	計画力	-0.02
	10	課題発見力	4.52	発信力	4.51	状況把握力	-0.03
	11	主体性	4.51	規律性	4.43	発信力	-0.04
	12	ストレスコントロール力	4.13	ストレスコントロール力	4.31	規律性	-0.10
		12項目の平均	4.56		4.61	変化の平均	+0.096

(2012年, 筆者作成)

【表7】 2回目のアンケート集計

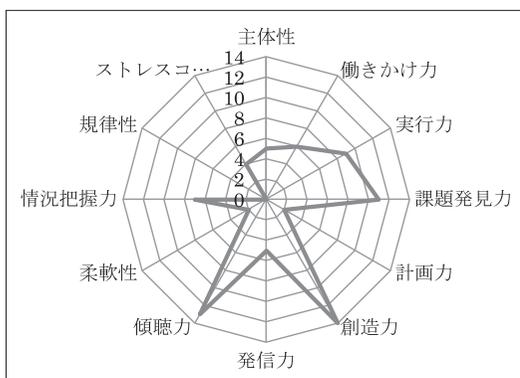
身についた力(複数選択可)の合計	
創造力	60.8%
実行力	54.4%
状況把握力	54.4%
傾聴力	45.6%
柔軟性	38.0%
課題発見力	35.4%
働きかけ力	34.2%
ストレスコントロール力	27.8%
主体性	26.6%
計画力	26.6%
発信力	26.6%
規律性	20.3%

(2012年, 筆者作成)



(2012年, 筆者作成)

【図2】 自分に身についた力の合計(複数選択可)



(2012年, 筆者作成)

【図3】 自分に身についた力の合計(1つだけ選択)

力」「計画力」「主体性」の7能力要素の必要度が2回目の平均よりも高く評価された。

さらに、各能力要素を見ていくと、1回目よりも平均が上がっていたものは「ストレスコントロール力」「働きかけ力」「傾聴力」「主体性」「実行力」「創造力」「課題発見力」「柔軟性」であり、12能力要素のうち8要素だった。特に変化が大きかったのは、ストレスコントロール力で0.18点上昇していた。次に「傾聴力」が0.12点、そして「主体性」が0.11点の上昇であった。

② **結果3** 創作ダンス活動で高められた社会人基礎力

表7のように、1番多かったのが「創造力」で60.8%だった。次いで54.4%の「実行力」で、「状況把握力」が51.9%だった。「創造力」「実行力」「状況把握力」に対して高められたと自己評価した学生が過半数を超えたため、今回の創作ダンス活動を通じて高められた社会人基礎力といえよう。また、最も高められた能力要素の一つだけ選択した場合の結果である「創造力」「傾聴力」「課題発見力」も創作ダンス活動で高められた社会人基礎力といえよう。(図2, 図3参照)。

2. 考察

(1) **考察1** 創作ダンス活動中に学生が直面する課題と問題の内容と問題解決学習

創作ダンスの活動段階として表3に挙げた「1. テーマ設定」「2. 選曲と作品構成」と「3. 作品構成・踊りこみ・衣装・舞台演出」にあるように、創作ダンス活動で学生が直面した課題として抽出された「テーマ設定」「選曲」「動きと作品構成」「衣装」「作品演出」「創造性」は創作ダンス作品を構成する要素であり、それ以外の「人間関係」「理想とのギャップ」「スケジュール調整」は作品上には表れないが、創作活動上で解決し乗り越えていく課題と考えられる。

このように、創作ダンス活動では、ダンス作品を構成する要素についての課題と、それらを円滑に進めるための作品上表面化されない課題を各グループの状況に応じた解決策を見出し乗り越えていくとい

う質の異なる問題解決学習が繰り返されていると考えられる。そのプロセスを経て、より良いダンス作品の創作とより快適な人間関係づくりがなされているといえよう。

(2) **考察2** 創作ダンス活動における社会人基礎力の必要度

創作ダンス活動前には、「実行力」「状況把握力」「創造力」「計画力」の4能力要素の必要度が平均より高く評価されたが、学生は創作ダンス活動を経験することで「ストレスコントロール力」「働きかけ力」「傾聴力」「主体性」の必要度を実感したことが明らかとなった。そして活動後は「実行力」「創造力」「状況把握力」「働きかけ力」「傾聴力」「計画力」「主体性」の7能力要素が平均よりも高く評価された。

創作ダンス活動を経験したことで必要度が平均よりも高まったのは「働きかけ力」「傾聴力」「主体性」で必要度の実感の度合いが高かったことから理解できるが、ストレスコントロール力は必要度の平均よりも下回り、1回目・2回目ともに最下位であった。これは、他の能力要素よりも必要度は低いものの、活動前はそれほど必要ではないと評価していたが、活動で様々なストレスを体験し、それを乗り越えるための力の必要度を強く実感したといえる。また、体験したことで「働きかけ力」「傾聴力」「主体性」の3能力要素の必要度が平均よりも高く評価されたことは、経験したからこそ理解できたことといえよう。

よって、創作ダンス活動では「実行力」「創造力」「状況把握力」「働きかけ力※」「傾聴力※」「計画力」「主体性※」の必要度が高く、そのうち※印の3要素は実際に経験したことで必要度が高まったため、経験することの重要性がうかがえる。

(3) **考察3** 創作ダンス活動で高められた社会人基礎力

創作ダンス活動で高まったと自己評価された能力要素は「創造力」「実行力」「状況把握力」「傾聴力」「課題発見力」であった。**結果2**で明らかになった創作ダンス活動で必要度の高い能力要素(表6の「2回目平均」の欄)と比較すると、課題発見力の

必要度が平均以下の能力要素であった。これは、各グループで状況を把握し、課題を見つける場面が多かったためと推察されるが、各グループで少なくとも7つの課題を解決した上に、ダンス作品の完成度を高めるために互いに作品を見合い、ダメ出しをして、改善しながら繰り返して踊るというプロセスが不可欠であることも影響しているのではないかと考えられる。

Ⅲ おわりに

本研究では、社会人基礎力の育成のための「学びの好循環」の場面設定を、ダンス学習の特性そのものと重ねて、問題解決学習で学生が直面する課題を明らかにし、創作ダンス活動における社会人基礎力の必要度と、学生の自己評価を基に実際に高められた社会人基礎力の能力要素を明らかにすることを目的にしていた。

結果として、創作ダンス活動における社会人基礎力の必要度と実際に学生が高められたと自己評価した社会人基礎力が異なっていたことがわかった。学びの好循環を設定しても、実際に経験することで初めてわかることや、経験してもすぐには身につかない能力があり、能力の育成は横断的に長期的に取り組んでいく必要があるといえよう。

また、問題解決学習の活動内容の再構成では学生が直面した課題が示されたが、どの課題も人間関係の営み無くしては解決へ至らなかったといえ、創作ダンス学習は人間関係の営みが不可欠であるといえよう。創作ダンス活動において、学生が直面する課題は様々であったが、活動単位が10名ほどのグループだったため、学生は互いに話し合うことを余儀なくされる。このように創作ダンス活動には他者と関わり合う仕掛けが組み込まれていると言えよう。そのプロセスを通じてどのように問題を解決すればよいかを試行錯誤しながら各々の答えを見出ししていく。更に、そこで求められるのは理解したことを実行する力である。「いま、そこで目の前の仲間に分分から働きかけなければ何も事が進まない」という逃げ場のない状況に気付くために、一歩が踏み出せ

るのである。約2か月間、理解したことを自分の身体を介して実際に動き、仲間と関わり合い自己表現を繰り返した結果、舞台未経験の学生が、公共の大舞台で800名もの観客を前にして堂々と存在することが可能となる。

今後の課題として、次の3点があげられる。

①創作ダンス活動で直面する課題について、今回は活動グループが8グループの全調査を行い、他の課題がないか検証する。

②各グループの活動内容について、自由記述以外の活動記録方法を検討する。

③対象学生の元来の能力や各グループ内で果たした役割との関係に着目し、個別に高められた能力について調査する。

以上が新たな課題と考えられるが、創作ダンス活動で高められる力は、本来計測できるものではなく、「社会人基礎力」という一つのものさしで自己評価し、定量化することで、今まで視覚化されなかった現象の側面を提示することができたことは意義のあることといえよう。また、今後の教材研究並びに指導法を効果的に展開する客観的指標の一つとして結果を活かしつつ、得られた結果が全てと捉えるのではなく、個々の学生を見ながら、今後も批判的な立場から本研究結果を実証していく必要があることは言うまでもない。

冒頭で述べたように学士力の中で社会人基礎力は主に人と積極的に関わり合い物事を成し遂げる力を担っているという観点から、学士力育成が期待されている大学の体育授業において、身体教育を通して貢献できる学士力育成の可能性を探るためにも長期的な取り組みが求められる。

【引用文献】

- ・経済産業省, 2010. 社会人基礎力育成の手引き. 第1版. 学校法人河合塾. 東京都豊島区
- ・大修館書店. 2012. 体育科教育. 60(2). 大修館書店.
- ・松田岩男・杉原隆, 1990. 新版運動心理学入門. 第5版. 大修館書店: 東京都千代田区: pp54-87.
- ・文部科学省, 2008. 平成20年度小学校新教育課程説明会中央説明会(全体会)資料: 新しい学習指導要領-小学校学習指導要領改訂, 移行措置等について(非刊

行 PDF 資料 <http://www.hyogo-c.ed.jp/~gimu-bo/ky-ouikukatei/syo02zentaikai.pdf>). 文部科学省.

- ・文部科学省, 2010. 新学習指導要領・生きる力保護者用パンフレット. 文部科学省.
- ・文部科学省, 2011年3月「新学習指導要領中学校保健体育【ダンス指導のためのリーフレット】. 文部科学省.

【参考文献】

- ・川口清司, 升方勝己, 広瀬貞樹, 寺山清志, 堀田裕弘, 2009. 理論と実践の融合による社会人基礎力育成と目に見える評価システムの構築. 工学教育. 57(5): pp84-90.
- ・向後千春, 富永敦子, 2009. 統計学がわかる[回帰分析・因子分析編]. 技術評論社: 東京都新宿区.
- ・社会人基礎力に関する研究会, 2006. 社会人基礎力に関する研究会一『中間とりまとめ』一. 社会人基礎力に関する研究会.
- ・社団法人全国大学体育連合, 2008. 大学体育危急の課題「大学基準協会評価項目変更と教養体育」: これからの学士課程における体育のあり方の検討(日本体育学会・全国大学体育連合共催シンポジウム). 大学体育35(2): pp81-107.
- ・中村恭子, 2009. 中学校ダンスの男女必修化の課題-中学校教員を対象とした調査にもとづいて-. 順天堂スポーツ健康科学研究. 1(1): pp27-39.
- ・中村恭子, 2009. 中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容-平成19年度, 20年度, 21年度, および24年度の年次推移から-. 日本女子体育連盟学術研究紀要. 26号: pp 1-16.

【注】

- i 経済産業省, 2010. 社会人基礎力育成の手引き. 第1版. 学校法人河合塾. 東京都豊島区, p62.
- ii 経済産業省, 2010. 社会人基礎力育成の手引き. 第1版. 学校法人河合塾. 東京都豊島区, p62.
- iii 大修館書店, 2012. 体育科教育. 60(2): 9参照.
- iv 平成23年度後期に開講された講義名が「体育Ⅱ」であり, 過去の講義名とは異なっている.
- v 社会人基礎力に関する研究会. 2006. 社会人基礎力に関する研究会一『中間とりまとめ』一. 1参照
- vi 就業力の広場 HP (トップ>記事詳細「教員や職員? 外部の専門家?『大学の就業力育成を誰が担うか』」 <http://www.riasec.co.jp/hiroba/archives/434> (2012年1月6日現在) 参照
- vii 文部科学省, 2010年8月「新学習指導要領・生きる力保護者用パンフレット」参照
- viii 文部科学省 HP (トップ>教育>小学校, 中学校,

高等学校>新学習指導要領・生きる力>Q&A>Q&A)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/10.htm
(2012年1月6日現在) 参照

- ix 文部科学省, 2011年3月「新学習指導要領中学校保健体育【ダンス指導のためのリーフレット】」参照
- x 文部科学省, 2011年3月「新学習指導要領中学校保健体育【ダンス指導のためのリーフレット】」. 文部科学省.
- xi 開始当初は, 対象学年や発表場所等, 現在の形式とは異なっていた。
- xii この選定方法は, 12グループある発表作品のうち, 発表会を鑑賞した本学児童学科1年生に特に印象に残った作品を3つ選択してもらい, 単純集計した結果,

上位4チームのダンス作品についておこなった。

- xiii ここでいう「作品演出」とは, 作品の完成度を高めるために最終段階に行う踊りこみによる動きの微調整の細かい演出を意味する。表3の創作ダンス活動の流れにある「舞台演出」よりも狭義で用いている。
- xiv ここでいう「創造性」とは, 他の作品と差別化をするための工夫や作品をより見ごたえのあるものにするための課題を意味する。
- xv ここでいう「理想とのギャップ」とは, 昨年度の2年生の演技を理想とした場合の学生が抱く不安を意味する。
- xvi 「スケジュール調整」とは, グループ内の学生同士の練習時間の調整を意味する。